

平成6年度

地域畜産状況レポートNo.1

社団法人 熊本県畜産会

黒毛和種乳用種 **F₁がなんと4.5等級**

山鹿市やまが牧場

山鹿市は、毎年8月15日「飾り灯籠」で幕を開く。その昔、菊池川一帯にたちこめた濃霧に進路を阻まれた景行天皇のご巡幸を山鹿の里人がたいまつを掲げてお迎えしたのが、その由来である。

装飾古墳郡、石造文化は自然のふれあい古代歴史とののであいに恵まれている。

日本一の質と量を誇るスイカ・メロンが全国の消費者にも届けられているが、県下では乳用種6%肉用種6%豚18%を占める畜産の町でもある。

ここに愛情をこめて肥育牛350頭を管理され、日本一の成績をあげておられる **やまが牧場** がある。

昭和48年22才で転職

ご主人は次男として生まれ、高校卒業と同時にサラリーマンとなる。

仕事は卸屋さんに勤め、学校給食等の配達業務をやっておられた。

結婚は20才。勤務先の娘さんと結婚。

長兄の都合により昭和48年、サラリーマンから突然実家の農業を継ぐことになる。

当時、実家の農業はみかん3ha、もも25a、水田70a、それに褐毛和牛の繁殖牛が子牛も含めて10頭ほどいた。父が主にみかんと繁殖牛を担当していたが、繁殖牛はなかなか種がつかず、肥育にまわるのもいた。このままでは将来に期待できないと、昭和51年乳用牝牛の肥育事業に本格的にとりくむため、総合施設資金1,200万円を借入れ、現在地に畜舎を新設。畜舎、400万円、素牛70~80頭、800万円でのスタートとなる。

素牛導入は專業者に依頼

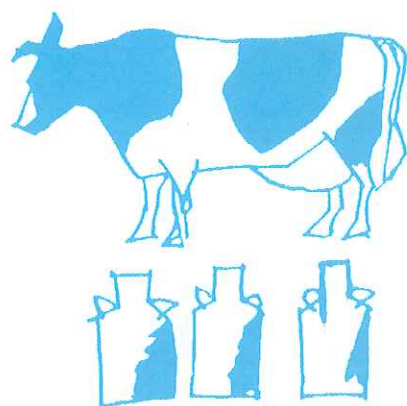
当牧場は、7～8年前、乳用牝犢からF₁に切り替えられた。

当初、素牛は広島県から導入してこられたが、最近では家畜改良事業団が扱う高能力種牝牛（黒毛和種）の精液が県下にも広く供給され、菊池郡の酪農家が生産するF₁素牛は肥育効率もよく、仕上がりは従来よりも、30～40kgも大きくなるので殆ど県内産となっている。

最近では、F₁の肥育農家が多く、競合することになり、一頭当たり12～13万円と高騰している。素牛は、酪農家との相対取引では心配するので、専門の業者に頼み、セリ市場で導入している。



エコー検査の結果説明



全頭(350頭)に鼻管がない

肥育の秘訣は、牛のストレスをいかになくすかである。鼻管をつけ、頭絡をつけると、どこにでもひっかけて事故をおこす。

当牧場の牛は、皆、馴れているからにはなぐり頭絡はいらぬ。

導入した素牛は当初ビクビクしており、お腹いっぱい哺乳させるといつまでも人にはなつかない。そこで、空腹にすると、人に寄りそってくるので、そのときすぐに哺乳せず、充分、頭や鼻を手でなでてから哺乳する。これを3～4日くりかえすと、腹一杯のときでも、すぐ人に近寄ってくる。これは、奥様の仕事である。(でも牛が好きだからできる。)

20～24カ月間出荷まで毎日毎日すべての牛を同じように頭、鼻、口を撫でるので、ト場に行っても、まるつきり他の牛とは違いおとなしくしているとか。ストレスがなく、とにかくかわいく育っている。

毎日牛舎には10時間

毎日、牛舎には、午前8時頃でかけ、帰りは午後7時頃となる。昼は1～2時間程自宅に帰るが、牛舎にいる時間は10時間ほどになる。

性格的にきれいずきでもあるが、掃除は朝夕の2回。極端ないいかたをすれば、わらすぼ1本でも落ちていても気になる。竹掃は（写真）の様に牛舎のどこにでもたてかけてある。

牛舎の消毒も徹底している。夏場は週に1回、約200ℓを天井をめがけ散布している。これでも完全ではないので、敷料に顆粒状の駆虫剤も散布している。そのため、蚊、ハエは殆どいない。牛にとっては、まさに快適である。



ロープ、竹掃が整然とおいてある



肩背腰の充実した出荷直前の肥育牛

餌のやりかた

餌は夫婦2人で給与している。奥さんがショベルを運転し、ご主人がスコップで給与する。牛は月令により肥育状態により1房1房ちがっているため、牛を見ながら給与量を手かげんしての給与となる。昔、自動給餌機で給与されたこともあったが、あまりにも均一しすぎ、結果はよくなかったとか。いまでは、攪拌した混合飼料をショベルで運んでいる。

肥育の前期・中期はヘクキューブを使っているが、その後はワラと自家配飼料である。

ビール粕は増体がよく、使いやすいが、奥さんの里が豆腐屋さんをやっておられることもあり、おからが主体である。おからの量は日によって違うが、日量約1t。これもすぐ腐るから使い方は非常にむずかしいとのこと。ビール粕のときもそうだったが、おからもひとつおりに使えるまでには5～6年かかるとのこと。夏は夕方には腐ってしまい、下痢することたびたびだったが、いまでは『菌』のおかげで夏は1日、冬場は7日間使えるようになっている。最近ようやく軌道に乗ってきたおからが経営に大きく貢献している。

肥育牛も満肉になり、出荷間近になると、たらたらと透明のよだれをたらすようになる。肩背腰の幅もきわめて充実してくる。こうなると殆ど仕上がっている。エコー検査でも **S+** である。

出荷は、だいたい毎月12頭、年間150頭。肥育牛の等級は、3等級57%、4等級以上36%。

敷料は20～30日で交換

インバーター（制御換気扇）の効果はすごい

昔は、150頭で年間450万円のノコズ代を必要としていたが、現在では、270頭で210万円と半減をしている。

堆肥だしも、昔は3カ月おきに実施していたが、いかにインバーターを使っているとはいえ、敷料が粘土のようになるのは、牛のためによくないので20～30日ごとに年間15～16回実施している。これも、肉質の向上におおきく貢献している。堆肥の量も半減しているが、堆肥は農事組合法人有機センターに出荷。その収入は年間約65万円。

今年の夏はノコズが乾燥し、舞い散るのでなかなか交換できなかった。かといって、インバーターを弱めにすると、牛が暑がって弱ってしまう。電気代はかさむが、牛にストレスがかからないからインバーターの効果は抜群である。

肥育経営成功の要因

牛をかわいがり、ストレスがないこともあるが、もうかる肥育経営は、中央畜産会がまとめる集計表をみると、一定の傾向がある。これは、販売価格が高いこともあるが、費用のなかで、燃料費・小農具費・修繕費・諸材料費それに借入金金利の少ないことである。端的にいえば、機械・施設を大事にし、借入金が少ないということになる。

やまが牧場の場合、日頃の努力のこともあるが、昭和51年、規模拡大にとりくまれたときから、模範的な投資をされていることからもうなずける。昭和51年の投資は、総合施設資金の1,200万円。その内訳は牛舎に400万円（これも殆ど自家労働で格安）、素牛代800万円。北海道から乳用牝犢250kgていどのものを70～80頭、導入しておられる。**肥育経営の明暗**は、この素牛をどのような資金を使ったかで、ほぼ決まるといえる。

やまが牧場の場合、据置3年を含む18年である。まさに、理想的といえる。

昭和61年～62年、乳用種から黒毛和種、乳用種のF₁交雑種に一挙に切替えられたときも、1,200万円を近代化資金、その後、60頭増頭されたときの1,000万円は畜産振興資金。これは経営浮上に大きな支えとなっている。

それに昭和54年、乳用牝犢がただどうぜんだったとき、軽自動車に乗せられるだけ1度に16頭をもらい、おまけに焼酎までもつけて下さったとか、これがなんと、約100頭。

結果は、枝肉でキロ1,200～1,300円で売ることができたとか。それぞれの借入金の償還については毎月計画的に積み立てておられる。磐石の経営といえる。